# 石井勲の漢字教室

## 3 石井方式漢字の教え方

## Ⅱ 教え方の実際

### 知っておきたい二十一のポイント




### 1 漢字でことの意味

#### ――かなより覚えやすい

昭和二十八年、私は指導主事をやめて、小学校の一年生を担任しました。かねて考えていた新しい教育法について、その効果を確認したかったからです。

わが国の文字教育は、明治以来、「まずかなで読み書きすることを教え、それに習熟させた後でないと漢字を教えない」ということになっています。

国語学習は、言葉であれ文字であれ、理解できればそれで良いというものではありません。理解した上でそれを反復練習し、それが身について自然と使えるようにならなければ、実用にはなりません。

だから、最初から正しい言葉や文字、社会の標準的な言葉や文字を教えなければいけません。便宜的なものが一度身についたら、それを改めることは、見かけはどんなにやさしそうに見えても実は大変む

ずかしいものです。

ところが、〝がっこう〟という便宜的ないわばにせものを学習させ、それに習熟させた後に〝学校〟というほんものを学習させているのですから、漢字の学習が必要以上にむずかしくなるのが当然です。その上、〝学校〟と学習してこそ、〝学びや〟の意味が正確に理解でき、それが〝学問〟や〝大学〟にも結びついて理解が深まるのであって、〝がっこう〟では〝がくもん〟と少しも結びつきません。

そう考えて、私は、一年生に対して初めから〝学校〟と数えることを試みたのです。この実験は昭和四十二年まで、十四年にわたりましたが、その結果、私の考えの正しかったことが証明されました。

漢字教育が小学校で成功しないのは、漢字がむずかしいからではなくて、初め、かなで学習させ、それを漢字に改めることがむずかしいからだ、ということを突きとめました。

ところで、この実験をしている間に、思いがけない発見が二つありました。その一つは「一年生にとっては、漢字の方がかなよりも容易に覚えられ、しかも読みやすい」ということです。また、漢字でも、〝七〟や〝八〟よりは〝雪〟や〝雲〟の方が覚えやすい、ということです。

もう一つは「漢字を最も容易に覚えるのは一年生で、漢字を覚える能力は学年が進むにつれて衰える」ということです。この事実は、最近著しい発達を遂げた大脳生理学が明らかにした「機械的な記憶力は生後の三年間が最高で、それ以後は次第に低下する」という学説と一致しています。

この二つは、今までの常識と全く正反対の事実で、私も初めてこの事実を発見した時には、何か特別の事情による例外的事実ではないかと疑ったほどです。十四年間にわたる追究で、初めてそれが普遍的な事実だということがわかりました。

この二つめの発見が、その後十四年間にわたる〝幼児の漢字教育〟実践の理由になるのですが、この間に発見した漢字教育の原理が〝漢字で教える〟ということだったのです。

**覚えようとしなければ忘れない**

現代の心理学は、記憶について「覚えようと努力して覚えたものは忘れるが、覚えようと努力しないで覚えたものは一生忘れない」と述べています。

覚えようと思うからには、何かその理由があります。目的と言った方が良いでしょう。例えば、「明日の試験のために覚える」というような。このような記憶は、試験が済めば自然に忘れていきます。

それは、目的を果たした以上、頭にいつまでも残しておく代物ではない、として頭から無駄を廃棄する自然の作用だというのです。だから〝漢字を教える〟と、子供はこれを努力して覚えるものの、試験が済むと忘れてしまうので漢字力が少しもつかないというわけです。私たちは幼児期に覚えた日本語を、一生忘れません。親が日本語を教えようとして教えたわけではありませんし、子供も日本語を覚えようとして覚えたわけではありません。努力しないでひとりでに覚えたから、一生忘れないのだ、というわけです。

〝漢字で教える〟というのは、漢字を覚えることを目的とさせないために考え出されたものです。漢字は教育の手段であって目的ではないから、こうして覚えた漢字は一生忘れないはずだ、という考えです。

しかし、〝漢字で教える〟ことの効果はそれだけではありませんでした。他に、もっともっと重大な教育効果があったのです。それは実践している間に、だれの目にも明瞭になっていったものです。

## 2 知識の83パーセントが目から

### ――障害児も年間二百の漢字を

〝漢字で教える〟ということを、実例で説明しましょう。

「手を洗う」という生活指導だとしますと、黒板にまず「手を洗う」と書きます。すると、好奇心が強い幼児たちは、何を書くのだろうと黒板に目をやります。

そこで、黒板の字を指さしながら「手を洗う」と読みます。そして「今日は〝手を洗う〟ということで大切なお話をします。皆さんは、どんな時に手を洗いますか。はい、だれか?」と言って発言をうながします。

「手を洗う」という言葉を口にするたびごとに、黒板の字を指さしますので、幼児たちは「ああ、あれは〝てをあらう〟と読む字なのか」と思います。幼児期は記憶力が最も強いので、幼児たちはそう思っただけで、この「手を洗う」が頭に焼き付けられます。

ところで、私たちの知識は、五官別にこれを分類しますと、目によるものが八三パーセント、耳によ

るものが一一パーセント、その他の合計が六パーセント、ということになっています。目から得られる知識が圧倒的に多いのです。言い換えますと、耳に訴えるだけの教育は効率が良くないのです。

ところが、幼児には字が読めないというので、幼児教育では耳に聞かせる教育がほとんどです。だから、幼児教育は知育には適しないと考えられ、社会性を伸ばす教育や情操を養う教育が重要だ、と主張してきたのです。しかし、情操でも社会性でも、知性が低くては教育効果が上がらず、知育は小学校に進んでから、それまでは情操や社会性をつける教育、などと分けて考えるべきものではないのです。

事実、耳に訴えると同時に、「手を洗う」という〝目で見る言葉〟により幼児の目に訴えますと、幼児は目と耳と二つの器官を使いますので、耳だけに訴えるのに比べて、ずっと良く頭の中に入ります。学者の調査によりますと、「目と耳とによる記憶は、耳だけの記憶の六・五倍も強い」と言われています。

また、足を使えば使うほど足が達者になるように、頭を使えば使うほど頭の働きが良くなりますので、目と耳とを働かせる教育は、耳だけを働かせる教育よりも頭の働きを良くし、理解力が高まりますので、自然と社会性も伸び情操も豊かになることが、明らかに認められます。

つまり〝漢字で教える〟ということは、今までの耳に訴えるだけの教育に対して、目と耳とに訴える教育ということで、従来の六倍半もの効果をあげる教育なのです。

なぜそんなにも教育効果に違いが生ずるのか、疑問に思われる方もあると思いますので、その理由を簡単に述べましょう。

耳で聞く言葉は「手を洗う」という短いものでも、五つの音声が相続いて発生し、発生と同時に消えてしまいますので、その間、一瞬の油断も許されません。途中の一つの音声を受け取りそこねても、全体がそのために不明瞭になってしまいます。

これが十分、二十分と継続すれば、幼児にはもう受け取りかねて、精神を集中させることが不可能に



なり、落ち着きを失うのです。しかも、言葉が次から次へと襲って来るので、一旦受け入れたものでも定着できず、全く忘れられてしまうのです。

**〝目で見る言葉〟は忘れない**

それに反して、目で見る言葉の「手を洗う」は、全体が一瞬に目に入り、その上それがしっかりと受け入れられるまで、消えることなく待っていてくれます。だから、話が済んだあとでも、「手を洗う」という字が「今日のお話は〝手を洗う〟ということだったよ」と訴えてその記憶を確実にしてくれます。だから、「なぜ手を洗うのか」ということも、それに関連して頭の中にしっかりと納まり、「手を洗う」という字をちらっと一瞬見ただけで、それらのことまで連想し、記憶を深めていくのです。

これらのことは初めから予想していたわけではありません。この教育を実践している間にまずその事実が現われ、次にその事実を説明できる理由を追求することで、次第に明らかになってきたのです。

知識の八三パーセントが目によるものと言われるだけに、幼児に目に訴えることをせずに耳にだけ訴え続けますと、幼児の目は刺激を求めてキョロキョロし始めます。こうなりますと、耳は「聞けども聞えず」という状態ですから、幼児は何も習得できなくなります。

「漢字で教える」教育は、耳と同時に目に訴える教育ですから、そして、好奇心旺盛な幼児の心を十分に満足させる教育ですから、全心全霊を傾けて学習してくれます。そのことは、黒板を見る幼児の目がキラキラ輝いていることでよくわかります。

十四年間にわたるこの教育は、実践に足を踏み入れた幼稚園、保育園で、実践を取り止めたという園がないという事実がこの教育のすばらしさをよく証明していると思います。

## 3　〝目で見る言葉〟の漢字

### ――瞬時にわかる意味、内容

「漢字で教えるとは、目と耳とに訴える教育であり、目と耳とを同時に働かせて行なう学習である」ということを申しますと、「では漢字でなくて、かなでもよいではないか」とおっしゃる方がいます。「幼児にはかなの方がふさわしい」という古い固定観念にとらわれての発言でしょうが、「幼児には漢字の

方がずっとふさわしい」という新しい事実をよくよく認識してほしいと思います。

しかし、〝漢字で教える〟ことの理由はただそれだけではありません。漢字は〝目で見る言葉〟だからです。言葉ですから、漢字は意味と発音との二つの言語要素を備えています。だから、漢字を見れば、その意味と発音とが瞬時に頭にひらめきます。

例えば、花と鼻とは同じ〝はな〟という発音ですが、その字を見ればそれぞれその異なった意味内容を直に頭の中に思い浮かべることが出来ます。しかし〝はな〟というかなでは、単にその発音を思い浮かべられるだけで、その意味内容は少しも思い浮かべられません。その発音を土台に改めて考えてみなければなりません。

それも、〝はな〟には〝花・鼻〟のほかに〝端・華・洟〟などがあるので、それらを一つ一つ思い浮かべることが出来るというものではありません。それが漢字だと、一瞬のうちに思い浮かべることが出来るのです。

このように、かなは言葉の要素の一つである〝発音〟だけしか表わすことが出来ない文字ですから、〝目で見る言葉〟とは言えないのです。言葉の重要な要素の〝意味〟を備える漢字だけが〝目で見る言葉〟なのです。

「下駄箱の名前をかなで書いていた当時には、入園後一週間たっても、園児たちは自分の場所がわからないでうろうろしていたものです。しかし、漢字で書くようになってからは、入園たった一日でまごつく子供がいなくなりました」とはよく聞く言葉です。

漢字の名前はその子供だけのもので、見るからに個性があり、その子の全人格を表わしているように思われるものがあります。だから、それを見た瞬間にその子の顔が生き生きと目に浮かんで来るのです。

ところが、かなで書かれた名前は、どの子の名前も皆同じように見えて、その文字面からはその子の顔が少しも浮かんで来ません。だから、下駄箱のかな書きの名札の中から一つの名前を見付け出すのには、ひどく時間がかかるわけです。

漢字の名前は生き生きとしていて、個有の表情をもっています。だから、これを読もうとしている人に強く訴えるものがあり、従って読みやすいのです。

**テレビに負けない読書の創造性**

今までの教育は、初めは、かなばかりの本を読ませてきました。これが、テレビの盛んな今日、子供たちが書物を読みたがらなくなった原因の大きな一つです。

「テレビを見るから書物を読みたがらないのだ」と多くの人々が言います。テレビは、少しの努力もいらないでよく解り、楽しいので、努力のいる読書はしたがらないのだ、というのです。

しかし人間は、すべて努力を嫌い、楽なことばかりを求めているわけではありません。楽に出来ることを避け、困難を求める人も多くいます。ただ、全く不可能なことや、全く無味乾燥なことは、だれだってやろうとはしないでしょう。

かなばかりの本は、読んだ字が漢字のようにはその内容を頭の中に描き出すことを可能にしてくれないので、読書が無味乾燥になりがちです。また、漢字の多い本でも、漢字力の弱い今の子どもたちには、とても読めないと思わせてしまいます。

決して、テレビを見る、見ないには関係ないことです。その証拠に、幼児期に漢字教育を受けて強い漢字力をもった子どもは、テレビや漫画よりも、漢字の多い、内容の豊かな書物を喜んで読んでいます。

絵本の絵より、テレビの画面より、文字を読み、それによって頭の中に自由に描く絵の方がずっとすばらしいし、子どもの心を満足させるからだと思います。また、こういう読書によって想像力が活発になり、創造性の豊かな人間になって行くのだと思います。

書物は〝本〟と言われるように、人間の成長にとって欠くことの出来ない原動力となるものです。だから、一日も早く読書の楽しさを知り、読書の習慣を身につけることが、何よりも必要なことです。そのためには、初め漢字を与え、決してかなを与えないことが大切だ、ということをぜひ知っていただきたいと思います。

## 4 食事の前後に漢字カード

### ――三年で一千字が読める

幼稚園における漢字教育は、「漢字で教える」漢字教育でなければなりませんが、家庭における漢字

教育は、「漢字を教える」漢字教育でよろしいのです。

幼稚園の漢字教育は、幼稚園におけるすべての教育活動を通して行なうものですから、「漢字で教える」という姿勢が特に有効であり、また大切なのです。

しかし、家庭には、幼稚園のような教育のための施設も時間もなく、また、幼稚園の先生のような指導力を持ったお母さんはまずいないと考えなければなりません。だから、簡単な知識だけで、かつ、容易に出来る指導法でなければなりません。それで、端的に「漢字を教える」漢字教育を目指すのが良い、と言うわけです。

また、教育は長い期間にわたり、継続して実践することが大切です。「石の土にも三年」という諺がありますが、一旦、漢字教育をやってみ ようと決心したからには、ぜひとも三年間は継続して実践してほしいと思います。そのためにも、簡単な知識だけで容易に出来る指導方法、と考えたわけです。

さて、最も容易に出来る方法は次の通りです。毎食事の前後に、漢字カードを子どもに見せ、これを読んでやることです。見せる時間は十秒もあれば十分です。

初めに与える漢字は、子供の好きな物、喜びそうな内容をもった漢字がよろしい。猫の好きな子供だったら、「この字は坊やの好きな猫という字よ。ねこ、ねこ」と言って教えてやります。

また、苺の好きな子供だったら、「この字はお前の大好きな苺という字よ。いちご、いちご」と言って教えてやります。普通の速さで、少し大きめの声で、口をしっかりと動かし、はっきりとした発音で読んでやります。

一日三回の食事の前後にやりますから、毎回十秒間かかるとして、一日の学習に要する時間はちょうど一分間です。この時、「これは苺という字よ。カードを見て、いちごと読んでごらんなさい」と言って読ませるのは、一層良いことです。

さて、第二日めは、昨日教えてやった漢字カードを見せて、「これは何という字？ 読んでごらん」と言います。すると、必ずと言って良いくらい、その漢字を覚えて正しく読みます。

読めたら、「よく読めたわね。では、今日は新しい字を教えてあげましょうね」と言って、次の漢字を第一日と同じ要領で教えてやります。第二日めは、これをやはり朝、昼、夕と六回くり返します。前日の漢字カードを一回めで読めても、必ず六回とも質問して読ませることが必要です。

**読めないのを責めるのは禁物**

では、昨日の漢字カードが読めなかった場合はどうするかと言いますと、初めて教えるような調子で、「この字はね。お前の大好きな苺という字よ。いちご、いちご」と言って教えてやれば良いのです。決して、「昨日、六回も教えてやったのよ」と言って、子供を責めたりすることは禁物です。

こういう子供こそ、実は大器晩成型の頼もしい子供ですが、軌道に乗るまで指導に骨が折れても、あせらずにじっくりと教えることが大切です。あせって子供を責めたら、折角の有望な素質を傷つけ、だめな子どもにしてしまいます。

こうして、毎日「これ、何ていう字?」と質問するカードが一枚ずつふえていき、八日めにはこれが七枚になります。その後も、毎日一枚ずつ新しいカードが追加されていきますが、一日六回、一週間質問して読ませたカードはそれで質問するのを打切りますから、質問するカードは七枚以上ふえることはありません。

新しいカードが毎日一枚追加されますが、同時に一枚ずつへらしていきますので、毎日七枚のカードを質問して読ませ、新しく一枚の漢字を教えてやる、というわけです。七枚のカードの質問に二十秒、新しい漢字カードを教えるのに十秒、合計三十秒間が、毎回学習するのに要する時間で、一日の合計がちょうど三分間になります。

一日に六回、それを七日間続けて復習するわけですから、一枚のカードは必ず四十二回くり返して読まされることになります。これだけ練習しますと、うまくすれば一生のものになります。記憶のある間に、どこかでその漢字を見る機会があって、記憶がさらに強められるからです。

こうして、三年間続けて実践しますと、一千字の漢字が覚えて読めるようになり、中学生向けの本でも読めるようになります。そうなれば必ず読書好きの子供になりますので、漢字力はますます伸びていきます。こうなったらもうしめたものです。

## 5 小学校からでは遅すぎる
### ――一千字の漢字教育を

前項で「毎日一字ずつ漢字を学習し、これを確実に自分のものにしていく」という家庭学習法を紹介しました。これを実践して下さったお母さんの子供は、一か月では三十字の漢字を学習したはずであり、そのうちの二十三字は確実に習得したことと思います。

「塵も積もれば山となる」の諺の通り、一日に僅か一字ずつでも、一月には三十字、一年には三百六十五字。三年たてば一千字を越えるのです。「小を積んで大を成す」の努力が何よりも大切だと思うわけです。

中学を卒業するまでに習得すべき漢字が、〝教育漢字〟と呼ばれて、その数は八百八十一字でした。昭和三十六年の文部省指導要領の改訂で、これが小学校を卒業するまでに習得するように改められ、現在ではこれに百十五字が追加され、九百九十六字にふえましたが、それでもまだ一千字に足りません。

ところが、その漢字が習得できる子供は三割もいないのです。大部分の子供たちは習得できないままに中学に進学しますので、教科書の読めない生徒になってしまうのです。教科書が読めなくては学習のしようがありません。だから、こういう生徒が学校を嫌うようになり、いわゆる落ちこぼれの要因にもなるわけです。




ところが、三歳からこの学習法を実践しますと、小学校に入学する前に一千字の漢字を身につけてしまいますから、まだ小学生にもならないうちから、今の中学生以上に書物が読めるようになります。こうなりますと、読書が楽しく出来るようになり、学校が好きになります。

「いや、うちの子はそこまでは望まない。小学校を卒業するまでに一千字の漢字を習得できれば結構」とお考えになるお母さんがいらっしゃると思います。しかし、小学校の六年間で一千字の漢字を習得させることは困難だということを知

らなければなりません。

小学生は、三年生以後になりますと、覚えようと努力してもなかなか覚えられなくなるのです。だから、大部分の子供が習得できないままに中学生になるのです。決して怠けているわけではありません。

これに対して、幼児は覚えようという努力なしに漢字が覚えられるのです。小学校六年間には習得困難な一千字の漢字が、幼児期だと三年間に容易に覚えられるのです。前回述べましたように、一日僅か三分間の学習で覚えられるのです。

だから、幼児期のうちに一千字の漢字をぜひとも身につけることを　お奨めするのです。幼児期の漢字学習は、幼児の楽しみにこそなれ、決して負担にはなりません。この時期を無為に過ごして、苦労させて小学校で漢字学習をさせてはなりません。苦労して覚えられる確信があるのなら結構です。しかし、七割の子供は失敗しているという現実だけは頭に置いて下さい。

**漢字こそあらゆる学習の基礎**

漢字は、すでに数回にわたって述べていますように、あらゆる教科学習の基礎力です。漢字力が強ければ強いほど、教科書を読み取るのに要する時間が少なくて済み、その上、理解度が深いので、すべての教科学習の能率が非常に高くなります。

反対に、漢字力が弱かったら、教科書を読むのに時間がかかるばかりではなく、わからない漢字が多かったら内容を理解することが出来ません。理解できない学習を続けることほど、つらく苦しいことはないでしょう。それは正に拷問に等しい苦痛だと思います。

そういう毎日を余儀なくされる中学生や高校生が、その苦痛から逃れようとして、あるいはまた、その苦痛を癒そうとして、非行に走るのです。それはまことに無理もないことだと、私は同情に耐えません。

彼らが悪い行為をしたとしても、そうしなければ収まらない事情があるのです。教科書の読めない子供に、学校へ登校させ学習させることを強要する親の方に罪が大きい、と私は思うのです。学校は学問をする所です。学問するためには読書能力がなければなりません。漢字力は絶対に欠くことの出来ない能力です。その能力もないのにどうして学問せよと子供に強制するのです。どうして学校へ行くことを強要するのです。

小学校を卒業しても漢字力が弱かったら、学校へ行くことを強要すべきではありません。このことを守るだけで、非行少年少女の数は著しく少なくなるでしょう。人間には学問だけが大切なものではありません。他にいくらでも人間を偉大にする道はあるのです。

しかし、学問をさせたい、学校へ行かせたい、ということでしたら、何よりもまず漢字力の強い子供に育てることが必要です。それには、小学校からでは何としても遅すぎることをよく知って下さい。最も良いのは、三歳から、前回述べました家庭学習法を実践することです。一日一字。あせらず、確実に三年間続けて下さい。

## 6 漢字は最高の〝褒美〟

### ――良い親子関係は幼児期に

「一日三分間の家庭漢字学習法」を毎日欠かさず三か月間実行して、順調に進めば、学習漢字の数は九十字を越えるはずです。休まずに実践するということは、たとえ僅かでも偉大なことを容易にやってのけるものですね。

それだけに、ついうかうかと無為に日を過ごすとは、実にもったいないことであり、長い間には取り返しのつかないほど大きな損失をしていることになります。一日三分間という時間の偉大な働きには、全く驚かされます。

ところで、皆さんの中には、この漢字学習を喜んでやっていらっしゃる子供さんもいれば、反対に、少しも喜ばない子供さんもいらっしゃると思います。喜んでやる子供は、容易に漢字を覚えますが、喜んでやらない子供は、なかなか漢字を覚えないものです。この場合、親の方も面倒くさくなって途中でやめてしまいがちです。

今までに、八十字以上九十字までの漢字が読めるようになったお子さんの場合は、大変結構です。そういうお子さんなら、漢字がうまく行くだけでなく、どんなことをさせてもうまく行くからです。一事が万事という言葉通り、漢字が子供の能力を開発するからです。

しかし、八十字までに至らなかったお子さんの場合、特に、途中でやめてしまったお子さんの場合は〝要注意〟です。これも一事が万事ということになりますから、このまま放置していますと、それこそ

取り返しがつかない事態になってしまいます。思い切った生活態度の切り替えがぜひ必要です。

およそ物事の好き嫌いというものは、最初の第一印象で決まってしまうことが多いものです。だから、最初の漢字の提示の仕方がとても大切です。子供の関心に訴え、興味をそそるように工夫することが必要です。また、お母さん自身が、いかにも楽しくて仕方がないような様子を見せ、楽しい雰囲気作りをすることも必要です。

そうしないで、もしもお母さんが、子供を勉強に向かわせるのだというような意識で始めたり、また、事務的な処理でもするような態度でやったりしたなら、必ず失敗するに違いありません。

この漢字学習は、子供が良い子であったことの褒美としてやる性質のものであって、子供に義務として課すべき性質のものではないのです。漢字の意味が理解でき、漢字が読めるようになるということは、子供にとってこの上もない誇りであり、大変な喜びなのです。

ところが、これが義務として課せられることになりますと、それはもう喜びでも楽しみでもなくなるのです。ちょうどそれは、お金特が人を無料で自分の車に乗せることは喜んでやりますが、お金を取って仕事としてやるのだったら、いくら大金を積まれても決してやる気にならないのと、同じようなものです。

だから、「昨日は、お前はほんとに良い子だったわね。それで御褒美に、今日はこの漢字を教えてやりましょう。この字はね、お前の大好きな桃、〝もも〟という字よ。この字はね、中学生のお兄ちゃんやお姉ちゃんでもまだ習わない字なの（これは事実です）。でも、××ちゃんは覚えて読めるようになれるわね。では〝もも〟って読んでごらんなさい」というように語りかければ、喜んで、張り切って漢字に立ち向かうはずです。

**関心と反復が記憶を強化**

すでに述べましたように、記憶は、関心の強さと、反復の回数とによって作られるるのですから、強い関心を向けずにはいられないような工夫をしてやることが大切です。幼児期は最も記憶力の強い時期ですから、強い関心で目にした漢字は、僅か一回、ただの一秒間でも覚えることが出来るものです。

これに反して、子供が漢字に全く関心を示しませんと、どんなに多くの時間をかけ、どんなに頻繁にくり返して教えてやっても、決して覚えるものではありません。「心ここにあらざれば見れども見えず」

で、それを大脳が受けつけないからです。

もしもこのような状態を毎日くり返していますと、子供はますますこの学習を嫌うようになり、漢字そのものを嫌うようにさえなるでしょう。良い親子関係は幼児期に作られます。この時期に良い親子関係を作っておきませんと、骨が折れるだけで、子供は少しも良くなりません。

子供の指導に計画性も一貫性もなく、思いつきの行き当たりばったりでは子供は悪くなるのが当然です。

親と子が、それぞれの生活を楽しむ一方で、漢字学習を通じて共に睦み合い楽しむならば、子供は立派な社会人に成長していくでしょう。この中で、子供が自由を発揮する面と、その反対に、欲望をおさえなければならない生活の両面があることを理解させたら、必ず立派な子供に育つと思います。

## 7 漢字を読む力を養ってこそ

### ――本の楽しさ教えよう

書物は、長い年月にわたって人類が作り上げて来た文化の、凝縮されたものです。人間にとって、これ以上に価値のあるものは考えられません。書物は言わば人類の宝庫です。しかしながら、その宝庫も、これを開ける鍵を持たない者にとっては、どうすることも出来ません。書物も、これが読めない者にとっては、正に〝猫に小判〟であり、全く価値のないものになってしまいます。

そこでどこの親も「本を読ませるための工夫」に悩むわけです。私もよく「本を買ってやるのだが、一向に本を読んでくれない。どうしたら読んでくれるようになるのか」という相談を受けます。そもそも〝本を読みたがらない〟のには、二つの理由が考えられます。一つは、「本の楽しさをまだ知らない」ことです。本の楽しさを知らなくて、どうして本を読みたがるでしょう。この場合は、「本というものは楽しいものだ」ということをわからせることがまず必要です。

それには、幼いうちから童話やおとぎ話をよく聞かせてやり、次にそういう書物を読み聞かせてやる

ことが大切です。そうすれば、書物というものはおもしろいものだ、ということは自然とわかるはずです。

そうなれば、「早く独りで本が読めるようになりたい」という気持から、「早く漢字を覚えたい」という気持が起こり、漢字に対する関心が強まって、自然と早く漢字を覚え、読書能力が身につきます。

〝本を読みたがらない〟第二の理由は、「書物を読む能力が弱い」ことが挙げられます。書物を全く読めないようでは、勿論読みたい気持があっても読みませんが、読む力はあってもその力が弱いと、やはり書物を読みたがらないものです。

ちょうど足の弱い人に、遠い景色の美しい名所を散歩することを奨めるようなものです。そういう名所を散歩することの楽しさはよくわかっても、足が弱い人では「歩いてみよう」という気持にはなかなかなれません。足の強い人は歩きたがりますが、足の弱い人は歩くことを極力避けようとするものです。

それと同じことで、読書能力の強い子供は「本を読むな」と言われても本を読みたがるでしょう。反対に、読書能力の低い子供は「本を読みなさい」と言われても、本を読むことを極力避けようとするわけです。

〝本を読みたがらない〟というのには以上の二つの理由が考えられますので、〝本を読ませるための工夫〟としては、この二つの理由のいずれによるものかをまず見定めて、それから対策を考えることが必要です。

本を読みたがらない理由が第一の理由だった場合については、「本というものは楽しいものだ」ということをわからせることが必要だ、ということはすでに述べました。また、その対策についても、物語りを聞かせることや書物の読み聞かせが大切だ、と述べました。

**絵本や漫画もキッカケに**

その他、絵本や漫画などから入るのも一つの方法です。ただ絵本や漫画ばかり読んでいますと、親の方がいらいらして来て、「そんなものはやめて、ちゃんとした本を読みなさい」と言いたくなるものです。これが問題です。

絵本や漫画は、本の楽しさを子供に知らせるのにとても役に立つものです。だから、こういうものを通じて本に十分に親しませる一方で、漢字を読む力を養って行けば、自然と高度の本を読むようになっ

て行きます。

ところが、親はせっかちで、子供の読書能力のことを考えないで、ただ高度の本を読ませようとします。しかし、足の弱い者には楽しい遠足が苦痛なように、読書能力の弱い者には読書が苦痛なのです。いくら読書をすすめたところで、読もうとするものではありません。

そういう子供が、絵本や漫画を読むのは立派なもので、「よく読んでいるね」と言ってほめてやるべきものです。それだけの価値がある行為であり、事実、ほめてやりますと、子供はもっと高度の本を読んでみよう」という意欲が湧いてくるものだからです。

こうしておいて、他方で漢字力をつけてやる方策を実践していれば、子供は必ず高度の本を読むようになります。足を強くする訓練を続けていれば必ず足が強くなり、足が強くなれば「歩くな」と言っても必ず歩くようになるのと同じことです。

足が弱い間は決して遠出はしませんが、足が強くなれば、近所の散歩などでは満足できなくなるものです。それと同じように、強い漢字力を身につければ、絵本や漫画では満足できなくなるのです。

だから、絵本や漫画でも楽しんで読んでいるのを心配する必要はないのです。それが高度の読書への踏み台になるのですから、読まないことの方がほんとうは心配なのです。

## 8 幼児期こそ難しいものを

### ――意外なくらいすぐに覚える

石井教育研究所では、数年前から、全くかな文字のない漢文を幼児に教えて来ました。一クラスが六名内外の編成ですから、手軽にどんな指導でも試みられます。それでも、試みる前には、果たして受入れてくれるものかどうか、危ぶまれたものです。

しかし、やってみますと予想以上に幼児はこれに取り組み、意外なくらいよく覚え、読ませてみますと、よどみなく読みます。そんな話を、本会・理事長の井上文克先生（大阪・小路幼稚園園長）に話しましたら、「早速それをうちの幼稚園で実践してみたい」と言って、論語のテキストを作らされることになりました。幼稚園の先生方は、論語だと見たこともないと思いましたので、幼児にわかりやすいものを選んで、これを講義できるような形に編集してやりました。

その後、「うまく行っている」という話を井上先生から聞き、大阪へ出張した折、小路幼稚園を訪問して、その実際指導を見せてもらいました。ところが、研究所の少数クラスと違って、大勢で朗読する様は何とも壮観で、迫力を感ずるほどのものがありました。

それで、その様子を八ミリ映画に写してもらい、その年、東北大学で開催された〝大学漢文教育研究会〟の全国大会で、全国各地から参集された大学教授たちに見せ、大いに驚嘆させたものです。

その後、井上先生と話し合い、唐詩選・五言絶句（最短詩）の中から、幼児にわかりやすいものを約五十句ほど選び、幼稚園児用教科書として編集し、これを漢字教育実践園に普及して行こう、ということになりました。

ところが、私が園長をしている青桐幼稚園の子供たちには、一寸気遅れがして実践しかねていましたが、先生たちの意気込みに力を得て、まず年長児に試みました。すると、どの子もすらすらと読み、字を覚え、大丈夫だとわかりました。今では年少児も、年長児に負けずにやっています。

かねて私は、湯川秀樹博士が満三歳を迎えた正月から、論語などの漢文の学習を始めたという事実について、「博士の才能が特別に優れていたから、三歳で漢文が読めたのだ」という一般の考え方は誤りで、「三歳から漢文を学習したので秀才になったのだ」と推察していました。

それで、幼稚園児が、どの子も、論語や唐詩などの漢文を平気で学習し、覚えるという現実に接して、いよいよその感を強くしています。

夏目漱石や森鴎外の全集を見ますと、その学識の広さ深さに全く圧倒されてしまいます。とても人間業とは思えないほどです。しかし、それは幼児期を無為に過した私たちだからであって、幼児期から漢文を学習していたら、漱石や鴎外のように、英文やドイツ語が読めて書けるようになるのだと思います。

**大脳の発達は生後三年間が最高**

わが国の大脳生理学を打ち立てられた故・時実利彦先生は「大脳の発達は生後の三年間が最も目覚しく、ついでその後の六年間が著しい」とおっしゃっています。この最もよく発達する時期に頭を使えば、頭の働きは最も良くなるわけです。漱石・鴎外・湯川博士が偉大になれたわけです。

ところで、幼児期に余りよく出来るようになると、学校に入ってから学習がやさしすぎて、これをばかにするのではないか、と言って、幼児期の学習を疑う人がよくいます。これは幼児を大人の頭で見る、

全く誤った考えだと思います。

大人は生かじりの知識で満足しがちですが、幼児にはそんな者はいません。幼児は、出来れば出来るほど熱心に反復練習して止みません。文字を書く学習では、最もよく出来る子が最も熱心です。出来ない子ほど意欲に乏しく早く飽きてしまいます。

それだから、〝予習〟ということに意義があるのではありませんか。すでに知っているということが学習意欲を強めるものであって、もしもそれが学習意欲を弱める恐れがあるとしたら、予習が尊ばれるわけがないでしょう。

数学者・広中平祐氏が文化勲章を受けられた次の日、テレビでアナウンサーが、「先生は子供の頃から数学が大層よく出来たと伺っておりますが、学校の数学がやさし過ぎてつまらなかったのでは?」と言いかけるや、即座に「とんでもない。数学の時間が最も楽しく、最も意欲的だった」と答えていらっしゃいました。

「得意だから一生懸命にやる」というのが人間の本性であって、「不得意だから頑張る」ということは、望ましいことではあるが、なかなか出来ることではありません。

だから、私は、学校に進んで意欲的な学習の出来る子供にするために、幼児期から十分に学習させ、よく出来る、自信を持った子供にしてやりたいと思うものです。

## 9 〝合理化〟という漢字の働き

### ――音訓の整理は誤り

昭和三十六年の三月上旬、朝日新聞学芸欄の冒頭に、「漢字は濡れぎぬを着ている」という私の論文が掲載されました。

それは、その頃、音訓整理のため、〝お母さん〟という表記は禁じられていたのに、これを公立学校で学習指導に堂々と使っている私の公開授業を見学された大岡昇平氏が、そのことについて朝日の学芸欄に書かれたことがきっかけになり、当時、国語審議会副会長であった東大名誉教授倉石武四郎博士が、「なぜ音訓整理をする必要があるのか」を同じ欄に書かれました。

「漢字は、他の文字に比べて字数が著しく多い上に、一つの文字がいく通りにも読めるということで、




その繁雑さが一層ひどくなっている」だから、「極力音訓を少なくする必要があるのだ」という国語審議会としての見解が述べられました。それで、この倉石博士の見解や大岡氏の疑問に答えて、「なぜ音訓整理を守らずに、〝お母さん〟という表記をしているのか」という私の見解を述べることになったわけです。

「母という字が〝はは〟〝ぼ〟〝かあさん〟というように、いく通りにも読める」と言いますが、〝はは〟〝ぼ〟〝かあさん〟というのは言葉です。言葉がまずあって、次に文字があるのです。だから、問題は言葉にあるのであって、漢字には全く関係のないことなのです。

例えば、〝はは〟という言葉しかなかったなら、母という漢字は〝はは〟という読み方しかないことになります。だから、整理するなら言葉そのものを整理しなければ、ほんとうの整理にはならないのです。また、「一つの漢字がいく通りにも読める」という言い方をするから「繁雑さの原因が漢字にある」ように感じられるのです。「いくつもの言葉を一つの漢字で兼用させている」のが事実で、そういう言い方をすれば、「漢字は繁雑な言葉を整理し合理化している」ことになるのです。

### 漢字に着せられた〝濡れぎぬ〟

つまり、「漢字はとんでもない濡れぎぬを着ている」のです。〝はは〟〝ぼ〟〝かあさん〟は皆同じ概念の言葉です。同じ概念だから、同じ漢字で書き表わすことこそ合理的であり、これを別の字で書くことこそ繁雑であり、不合理と言うべきです。

さて、「国語審議会の見解が正しいか、石井の見解が正しいか、この欄でとことん討議しよう」と提案して、この論文を結びました。朝日新聞は、倉石博士に再登場させましたが、博士はこの問題については一言も触れずに逃げ、また、他の委員からの意見も全くありませんでした。

その一か月後、〝声〟欄に投稿して「音訓に関する国語審議会の見解は誤っている旨の論文を掲載し、

その反論を求めたが、未だにそれが全くない。これは石井の見解に対して非を見出すことが出来ないためと考えるが、そう考えてよろしいか」と念を押しました。

この投稿に対しても何の反応応ありませんでしたが、その年の暮です、朝日新聞の表記が変ったのは……。新聞の記事はすべて、国語審議会の定めた通りの表記法を用いていましたが、朝日は「それが必ずしも正しいとは言えない」とし、朝日独自の表記の基準を作ったのです。

それは主として、音訓と送りがなに関する違いですが、どちらも私の主張が取り入れられていて、〝おかあさん〟は〝お母さん〟になっていたのです。今の審議会は、この朝日の表記の基準を妥当だと認めました。〝お母さん〟は、二十年たってやっと日の目を見たのです。

私は「最終的には正しいものが必ず認められるものだ」ということを確信しています。だから、十分に研究し、検討し、正しいことが確信できたので、この二十年間、一歩も退かずに〝お母さん〟の表記を守り続けて来ました。今、その努力の甲斐があったことを嬉しく思っています。

個人の力は小さく弱いものです。今の審議会が大きく変化したのは、朝日新聞の表記の力だと思います。しかし、朝日新聞の表記の変わったのには、私の論文が大いに預って力があったと思います。

このように考えますと、個人の力は決して小さく弱いものではありません。努力のし甲斐があります。「漢字はかなよりも覚えやすい」「幼児期が漢字学習に最も適している」……これらは真理です。この真理が世に受け入れられないはずはありません。でも、一日でもその日が遅れれば遅れるだけ、子供たちが不幸であり、大変な損失です。

「漢字はむずかしい。幼児に漢字を教えるなど無理だ」という従来の固定観念に縛られている世の多くの人には、なかなか理解できないのは当然です。だから、真理に目を開かせることは困難であり、長い年月を必要とするわけです。

## 10 大切にしたい自国の言語

### ――言葉が能力を左右する

世界的な科学誌、「サイエンティフィックアメリカン」に、東京医科歯科大学の角田義信教授が、〝日本人の脳〟という論文を発表し、世界の脳諸科学を研究している学者を驚かせました。

今までは、言語だけは左の脳でこれを聴き、それ以外の音声はすべて右の脳で聴いていることが、科学の世界ではすでに証明済みとされていました。それが、角田教授の実験によりますと、「日本人に限り、鳥の声や虫の音を左の脳で聴いている」というのです。

しかも注目すべきことには、その異なった脳の仕組みが日本人の先天的な人種的特徴ではなくて、後天的・学習的なものだ、ということです。

それは、両親が共に純粋の日本人であっても、欧米に生まれ育ち、欧米語を母国語として生活している日本人の脳は、鳥の声や虫の音を、欧米人と同じように右の脳で聴いているということなのです。

角田教授は、そういう事実を実験によって証明したのです。この事実は、私たちにいろいろのことを考えさせる重要な問題を提供しています。

言葉が動物的存在である人間を真の人間にしている、ということはすでに多くの学者によって指摘され、異論のなかった所です。だから、言葉が、人間の精神を司る脳の形成に大きな役割を演じているであろうということは、実験を待つまでもなく、予想されて然るべきです。

ところが、コロンブスの卵のようなもので、ことの真相が発見されてみれば「そんなことは当り前のことだ」と、言える理由はあとからいくらでも出て来ますが、角田教授の発見がなかったら、なかなか「当り前のこと」が当り前とは思えないものです。

その意味で、角田教授の発見は、「日本人の精神を司る大脳が、日本語によって形成される」という事実を証明する偉大な発見で、「日本語の特徴こそが、日本人の物の考え方を特徴づけている」ことも考えられ、さらには、「日本語の特徴を研究すれば、日本人の物の見方や考え方の特徴を明らかにすることが出来る」ことも考えられるのです。

英語の教科書にある〝There is an ox〟という文を例に考えてみましょう。普通、この文は「一頭の牛がいます」と訳されますが、実は英語には、単に「牛がいます」と言おうにもその〝牛〟という言葉がありません。ox という言葉は必ず一頭の牛を言う時に使う言葉で、一頭でない牛は oxen と言わなければなりません。

言葉が初めからそういう性質を持っていますから、牛を見ても、まずそれが一頭か一頭でないかを確認できないうちは、「牛がいます」とは言えないわけです。

それだけではありません。oxもoxen も牡牛であって、しかも去勢された牛を言う言葉です。去勢さ

れない牡牛は bull と言い、牝牛は cow と言います。だから cowboy というのは、わが国の〝牛飼い〟に当たる言葉ではありますが、その牛は牝牛なのです。

つまり、日本人は牝牡（めすおす）に関係なく、また数に関係なく、「あそこに牛がいるよ」という言い方をしますが、アメリカ人は、まず牝牡を見分け、さらにその数を確認した後でないと、そのことが言葉にして言えないのです。

**貧弱な国語は貧弱な人間をつくる……**

このように、言葉のもつ性質によって、物の見方や考え方がどうしても異なったものにならざるを得ないことがよくわかると思います。従って、立派な国語をもった国の人間は自然と立派な考え方をするので立派になり、貧弱な国語をもつ国の人間は貧弱な人間にならざるを得ないというわけです。

それで、どこの国でも、国語教育に最も力を入れているのです。また、その国の言葉を立派な豊かなものにするための努力をしているのです。

例えば、フランスでは、各界最高の人物によって構成されたアカデミーにより、常にフランスの標準語が吟味され、一語でも変更がある時は政府がこれを公表し、辞典も直に改訂されるほどです。

また、ドイツの小学校では、三年生まで、学習総時数の三分の二に近い時間が、国語の学習に当てられています。算数を初め、音楽、図工、体育等、他の時間を全部合わせても、国語の学習時間数にとても及ばないのです。

このように、外国、とりわけ先進国の学校教育と比較してみる時、わが国の国語教育は著しく軽視されている、と言わざるを得ません。今はまだ、先進国の人たちの国語力に比べて、日本人の国語力は、一歩も譲らないほど高い水準を維持していますが、このまま行ったら、全く楽観を許しません。

人間の能力を左右するものが国語力である、とわかったからには、どうしたら高い国語力が養えるか、その方法を私たちは何よりも強く追求しなければならないと思います。

## Ⅱ 優れた言葉使いが生むもの
### ――融通性に富む性格にも一因

日本語の特徴の第一は、何と言っても〝てにをは〟にあります。これは中国語と比較してみれば、同じ文字を使っているだけによくわかります。例えば「送君還旧府」という文章は中国語では「ソウ・クン・カン・キュウ・フ」と読んでその意味を理解するのですが、日本語では「君が旧府に還るを送る」と読みます。

〝が・に・を〟という、全く意味（概念）を持たない言葉ですが、この言葉があるために、還るのが〝君〟であることがはっきりするのです。「送君還旧府」では、「君を送って旧府に還る」という意味にも取れるのです。

だから、これだけの文章では、旧府に還るのが〝君〟であるのかどうかは決められないのです。これが、中国の古典の読解しにくい最大の理由です。こういう点では、てにをはを持つ日本語は、読解に紛れが生じません。

英語やドイツ語やフランス語などの欧米諸諸では、これを格変化という形で解決していますが、これと〝てにをは〟を比べてみますと、その効果は断然〝てにをは〟の方が優れています。

そのことは、「僕は君に本を贈る」を、「君に本を僕は贈る」とも、「本を君に僕は贈る」とも、「君に僕は本を贈る」とも、「本を僕は君に贈る」とも言えることでわかります。どのように順序を変えようと、その意味は全く紛れません。

しかし、〝僕・君・本〟のどれが最初に来るかで、同じ内容でも微妙な違いが生じ、話の重点がどこにあるかがわかります。この点、中国語や欧米諸諸は言葉の順序が一定していますので、一定の表現しか出来ません。

こういうことが日本人の融通性に富む性格を作っているのではないかと思われます。反対に、欧米人の几帳面さはその言葉の融通性のなさによるのではないかと思われます。〝てにをは〟については、考えるべき問題がもっと多くありますが、問題が大きすぎてこれだけに止めておきます。

次の大きな特徴は、同じ意味（概念）の言葉がいくつもあって、相手の身分や親近の度合によってこれを使い分けている、ということです。例えば、英語では〝I〟（アイ）にあたる言葉でも、相手が

〝君〟と呼び合っている間柄の人に対しては〝僕〟を使いますが、〝貴様〟に対しては〝俺〟、〝あなた様〟に対しては〝わたくし〟、〝あなた〟に対しては〝わたし〟〝お前〟に対しては〝わし〟を使います。

また、自分を〝お父さん〟と呼ぶわが子に対しては、自らをも〝お父さん〟と称し、自分を〝伯父さん〟と呼ぶ甥や姪に対しては、〝伯父さん〟と自称し、自分を〝先生〟と呼んでくれる教え子たちに対しては、自ら〝先生〟と称します。

このように、英語なら〝I〟としか言いようのない言葉が、日本語には実に豊富にあって、相手によってこれを使い分けているのです。また、すでにその例を挙げましたが、英語の〝you〟にあたる言葉も、同じように豊富にあります。

**相手に応じた使い分けに特徴**

これらの言葉を、相手に応じて使い分けることにより、自分が相手に対して、どのような敬意を、もしくは親愛の情を、抱いているかを相手に伝え、両方の関係を円滑にさせているのです。

このことは、動作を表わす〝居る〟〝行く〟〝見る〟〝食べる〟というような言葉にも及んでいます。〝居（い）る〟は、自分及び目下の者の場合には〝居（お）る〟と言い、目上の者に対しては〝居（い）らっしゃる〟と言います。〝行く〟は、自分及び目下の者の場合には〝参る〟と言い、目上の者に対しては〝いらっしゃる〟と言い、〝見る〟は、〝拝見する〟に対して〝ご覧になる〟、〝食べる〟は、〝頂（戴）く〟に対して〝召上がる〟という言葉があります。

また、一般には、「上がらせて頂きます」「出席させて頂きます」というように、自分の行為は「……させて頂く」と言い、目上には「お上がりになりますか」「ご出席になりますか」というように、「お（ご）……になる」というように言って区別します。

このように言葉を正しく使い分けるためには、勿論、言葉についての知識が必要ですが、それ以上に、相手の気持を尊重し、良い関係を保持するために、言葉を使い分けるのだという配慮が大切です。

こういう言葉の使い分けは、日本人の暖かい心遣いから生み出されたものですが、今は逆に、この言葉の使い分けが、日本人の暖かい心遣いを育てているのです。

# 12 教育は親の仕事である

## ――指図よりまず手本を

〝教育〟というと、今では直に学校教育のことを思い浮かべますが、教育は、本来、学校の仕事である以上に、親の仕事なのです。ところが、学校教育というものが始まってからというもの、教育は主として学校の仕事であり、親はわが子を良い学校に入れ、学費を出してやるのがその仕事であるかのようになってしまいました。




しかし、〝教育〟という字は、それが親の仕事であることを物語っています。〝教〟の古い形、父の古い形は上図の通りです。父〔xǒ〕は交わることを表わしていて、これが教の発音〔xyǒ〕のもとの音でもあります。つまり、〝教〟とは、父と子とが交わることを表わした字です。父がその生き方をわが子に見せ、子はその父の姿から生き方を学び取ることを表わしています。

〝育〟は、子を逆さにした形の字と、肉〔ɔiku〕とで作られた字で、この字の発音〔iku〕は肉のなまったものです。肉は食物の意味で、生まれ出た子供に食べ物を与えて、これを養い育てることを表わしたものです。

このように、教は父の仕事を表わし、育は母親の仕事を表わしていて、教育が親の仕事であることは、漢字の成り立ちがよくこれを明らかにしています。ところで、教育を子供の立場から見ますと、〝学習〟ということになります。

〝学〟は、〝まなぶ〟と読まれていますが、古語では〝まねぶ〟と言い、それは〝まね（真似）る〟の古語でもあります。つまり、親と子との交わりの中で、子が親の言行を見聞きしてこれを真似ることが〝学〟なのです。〝習〟は〝ならう〟と読まれていますが、今の〝慣れる〟の古語である〝慣る〟の延音（移るが移ろうと変化する例）です。だから「習うよりも慣れろ」という諺がありますが、実は〝習う〟ことと、〝慣れる〟こととは同じことの別の・言い方、裏表の関係の言葉です。同じことをくり返しくり返し練習し慣れることです。習うと慣れるとを合わせた言葉に〝習慣〟があります。

ところで、子供はだれでも、この〝学習〟が好きなように生まれついているものです。つまり、真似

が大好きで、しかもこれが実に上手です。そして、その真似を何回でもくり返してやり、飽きるということを知りません。

論語の冒頭に「学んで時にこれを習う。また悦ばしからずや」とありますが、「学んだことを時々反復練習するようにしていると、それまで出来なかったことがうまく出来るようになる。それが実に嬉しい」という意味です。

学習は、出来ないことを出来るようにするために、絶対欠かせない行為です。その大切な学習が、子供にはだれでも大好きなように生まれついているということは、正に神の配慮としか言いようがありません。

## 子供の〝真似好き〟に配慮を

子供が真似好きで、しかもそれを飽きずにくり返すという性質があるのですから、教育とは、「親が立派な言行をすべく努力する」の一語に尽きる、ということが出来ます。つまり、子供の目や耳の届く所では、言行に極力注意して、少しでも立派な親の姿を披露するように努力することです。

私は、十代で両親を相次いで失いましたが、私の記憶の中の両親は実に立派で、それが今でも私の良い手本になっています。今思えば、両親は、子供の私の前では醜い面を隠し、良い面だけを示すよう努力してくれたのではないか、と思われます。

私の善悪の判断の基準は勿論、いかに生くべきかの心構えの基礎は、すべて親の姿を見聞きする中で、自然に作られていったものです。これが、教育の真の在り方だと思うものです。

前に、「親は子供を助けるつもりで、実はこれをそこねていることが多い」ことを指摘しました。子供の能力は、子供自身が頭を働かし実践することにより、養われ育つものであって、親が子供の世話をやき、手を貸すことは、その成長を妨害するだけです。

ところが世の多くの親たちは、子供にいちいち指図してその行動を規制し親の思う通りの人間にしたがっています。これでは、思考力の乏しい、無気力な人間になるだけで、自主性のある頼もしい人間にはなれません。

すでに述べたように、子供はすべて、真似ること（学ぶ）、くり返す（習う）ことが好きなように生まれついているのですから、指図しなくても、進んで喜んで学習するのです。

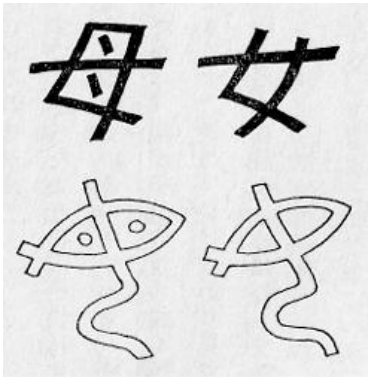
だから、親が子供の目の届く所で常に読書していれば、子供もこれを真似て自然に読書するようになります。親がテレビばかり見ているようなら、いくら「本を読みなさい」と言ったところで、子供は決して本を読むようになりません。

## 13 母は暮われる母となれ

### ――太陽に比すべき〝愛の力〟

前項で、「教という字の右半分の〝攵〟は〝父〟を表わしている」と言い、それは「手に斧を持つことを表わしたものである」と述べました。〝斤〟は斧の形を表わした字で、斧の本字です。その斧を持って働くのが父である、ということから、〝斧〟という字が作られたものと思われます。

そう考えて〝斧〟という字を見ていますと、家族のためにせっせと働く父親の姿がありありと伺われるではありませんか。その、せっせと働く姿を子供に見せることが〝教〟であり、「子供が父の働く姿を見てこれを真似ることが〝学〟である」ということを述べたわけです。




そこで次に〝母〟の意味について述べたいと思います。〝母〟という字の発音はボです。この発音は〝慕〟という字の発音と同じです。ということは、「母とは〝慕われる人〟である」ということを意味しているわけです。〝母〟という字は、上図のように、〝女〟の古い字形である〝𡚴〟に、二つの乳房を表わした〝丶丶〟を加えたものです。つまり、乳児を養育する母親の最も大切な箇所を表わしています。

母をボ（慕）と読む以上、〝慕われる人〟でなければなりません。もしわが子に慕われないような母親であったら、〝母（ボ）〟と呼ばれる資格はないわけです。だから、「どうしたら子供に好かれる母親になれるか」とは、「どうしたら、母親らしい母親になれるか」ということであり、真の母親になる道を求めることを表わした言葉です。ただ正確に言いますと、〝慕われる母親〟は〝好かれる母親〟と全く同じではありません。〝好き〟という言葉は〝嫌い〟の反対語で、「好きな犬」「好きなお菓子」というように、動植物や品物に対しても起こる感情です。これに対して、〝慕う〟という言葉は、人間が人間に対してだけ抱く高度な感情です。〝敬慕〟という言葉がありますように、その人柄が温かく立派



で、自然と敬愛せずにはいられない、そういう人に対して抱く感情なのです。

**嫌われる母親では説得力がない**

人間は感情の動物と言われるように、どんなに立派な言葉でも、それが嫌いな人の口から出た場合には聞き入れようともしませんが、敬慕する人の口から出た場合には耳を傾け素直に従います。だから、母親が〝慕われる母親〟であれば、子供は親の教えを素直に聞き入れて良い子になり、母親が〝嫌われる母親〟であれば、どんなに立派な教えにも反発して悪い子になるのです。

それで、論語にも「父、父たり。子、子たり」とあります。これは、「父が父らしくあれば、子は自然と立派な子になる」という意味の言葉で、「母が母らしく（慕われる母親）あれば、子は自然と立派な子になる」ということでもあります。

ところで、母らしい母を表わす言葉に〝慈母〟があります。〝慈〟は〝慈愛〟とも言い、太陽が草木に暖かい光を投げかけてこれを成育させるような、報償を求めない愛の心を表わした字です。

草木は太陽を慕うように、必ず太陽に向かって成長します。それと同じように、子供は慈母を慕い、そのいつくしみを受けて成長するものです。だから〝慕う〟とは、母の慈愛に応じて起こる子供の心の動きだ、と言えましょう。

つまり、〝慕われる母親〟とは、草木を育てる太陽のように、わが子を大きく包容して育てる慈母のことである、ということが出来ます。

私は五、六歳の頃、何か母を怨んで困らせてやろうと思い、部屋中に紙を細かく千切ってまき散らしたことがあります。ところが、母はこれをみて「まあお前は器用だね。お母さんにはとてもこんなに細かくは千切れない」と感心したのです。

その時の恥ずかしかったこと。六十年近い年月を経た今でも昨日のように鮮烈なものがあります。こ

れが太陽に比すべき母の慈愛の力なのでしょう。母に対する怨みは一ぺんに消えて、母を困らせるようなことは二度としないぞ、と固く心に誓わせたものです。

こうして太陽のような母の慈愛によって成長した私は、「私も母のような度量の広い人になりたい」と心に強く願うようになり、お蔭で一人前の人間になれたと、亡き母に感謝しているこの頃です。

## 14　まず自己制御の能力を
### ――必要な十回以上の反復

最近、〝過保護〟の弊害が強調されて、この面における反省が高まっているのは大層結構なことですが、その反動として、適当な保護や教育までが何かいけないことででもあるかのように考える親が目につくようになり、私は今それを心配しています。

というわけは、親の保護や教育は子供にとって絶対に必要なものだからです。人間の子供は他の動物と異なり、親の保護がなかったら生きて行くことさえ出来ず、また、親の教育がなかったら人間らしい人間には絶対になれないからです。

人間以外の動物は、頭脳が完成された状態で生まれて来るので、親の保護や教育がなくても立派に生きていけますが、その代り少しも進歩というものがありません。

ところが、人間の子供は頭脳が未完成の状態で生まれて来るものですから、教えてやらない限り、どんなにやさしいことでも知るはずがなく、また出来るはずがないのです。その代り、教えてやればそれを受け入れてどんどん能力を伸ばすことが出来るのです。

だから、人間だけが教育を必要とするわけですが、ぜひわが子に理解させ実行させたいと思うことは、そのことについて少なくとも十回以上言って聞かせる必要がある、ということを親たる者は知っていなければなりません。

なぜかと言いますと、耳で聞いたことは、その時はよくわかって頭の中に皆収まったように思っても、三日後にテストしてみますと、九〇％は忘れてしまっていて、僅か一〇％しか頭に残っていない、という実験調査があるからです。

だから、二回や三回くり返して教えてやったくらいで、子供が必ず記憶できるだろうと考えたら、と

んでもないことと言わなければなりません。ところが、一回か二回教えてやったくらいで、子供がわからなかったり出来なかったりしますと、子供を責める親が多くいます。

これでは子供はただ面くらうだけです。少しも良くなるわけがありません。それどころか、そのような親に対しては反感を持つに違いありません。反感を持ったら、どんなに受け入れやすい事でも素直に受け入れられるものではありません。

だから、こういう親の行為は、わが子を良い子にしたいという気持から出たとしても、事実は逆に子供を悪くする行為であって、親としてぜひとも反省し、改めていただきたいものです。

例えば、家の中で子供が騒いでいますと、いきなり叱りつける親がよくいます。子供は何で叱られたかわかりません。ここは叱るべき所ではなくて、優しく静かに教えてやるべき所です。そうすればよくわかり、気持よく受け入れられて、親の希望する子供に一歩近づくことが出来ます。こういう親が、前項で述べました〝慕われる親〟というものです。

## 親に求められる強い自制心

さて、親として子供に、何よりもまず必ず教えてやらなければならない、と私が思っていることがあります。それは〝自制心〟です。なぜかと言いますと、人間だけが自己を制御する必要があるように生まれついているからです。自己制御の出来ない人間は、ブレーキのきかない車と同じで、破滅する他はありません。

「猿に酒を飲ませる」という実験があります。酒の味を知った猿は、毎日、与えられた酒を喜んで飲みますが、必ず適量で切り上げ、決して深酒することかありません。だから、猿は毎日酒を飲んでもアル中には決してならない、ということです。

では猿は人間より賢いのか、と言いますと、勿論そうではありません。猿の頭の中にはサーモスタットのような働きがあって、それが食欲を自動制御しているのであって、人間のように自己制御しているのではありません。

それは、例えばバカチョンカメラで写真を撮るのと同じです。カメラの電子頭脳が、明暗や距離を自

動的に測定し調節して撮影するのに似ています。便利と言えば便利ですが、その代り可もなく不可もないという写真しか出来ません。

人間の頭脳は、プロの写真家が使う超高級カメラと同じで、操作をすべて自分の判断でしなければなりません。それは困難で努力のいることですが、その代り、自動制御ではとても及ばない立派な調整が出来、成功の喜びは一段と大きいものがあるわけです。

このことは、操作をすべて自分の判断で立派に出来るだけの能力を身につけない限り、プロの超高級カメラもバカチョンカメラに劣るし、人間も猿に劣る、ということを意味しています。

だから、人間は教育を必要としている唯一の動物であり、とりわけ自己制御の能力を身につける必要があるわけです。子の教育を怠れば、わが子が親である自分を殺すような事をしたとしても、それは不思議ではなく、また決して子供を責める事も出来ません。

## 15 言葉は人の心を養い育てる

### ――毎日子供に物語りを

アメリカの言語心理学者、プリマック夫妻は、赤ちゃんが生まれるとすぐ、赤ちゃんと同じ頃生まれたチンパンジーを買い取り、これを着物から食べ物に至るまですべて自分の子と同じにして育てました。

つまり、チンパンジーを自分の子と双子の兄弟のようにして育てたのです。初めは、チンパンジーの方が兄さんのようで賢そうにふるまっていましたが、赤ちゃんがプリマック夫妻の語りかける言葉を覚えてこれを真似るのに、チンパンジーの方はそれが全く出来なかったということです。

それで、初めはチンパンジーより幼稚に見えた赤ちゃんが、言葉を覚えてこれを使うようになると、たちまちにチンパンジーより賢くふるまうようになったということです。

この実験で、「言葉を覚えてこれが使えるのは人間だけである」ということ、「言葉を覚えてこれを使うことにより、人間は知識を高め、賢い行動が出来るようになる」ということが証明されたのです。

だから、子供を賢い子にしたかったら、赤ちゃんのうちから、出来る限り言葉をかけてやることが大

切だ、ということが言えます。ところが実際には、赤ちゃんを出来る限りはほって置こうとする親が少なくありません。

それで、赤ちゃんが独り遊びをするようだと、「手が掛らないで良い子だ」と喜んでいるようですが、これでは言葉を覚えることが出来ず、従って知能の発達が妨げられ、その上、何より大事な人間関係を作っていくための基礎作りが出来ないことになります。

幼稚園で、友だちとうまくやっていけない子、先生のお話に耳を傾けられない子というのは、親に会って話し合ってみますと、ほとんどが口を合せたように「独りでよく遊んで手のかからない良い子だった」と言っています。

いかに独りでよく遊べるからと言って、ほって置いたのでは、〝人〟は〝人間〟になれません。人の〝間〟に置かれて、顔を合わせ言葉を交わして初めて〝人間〟になれるのです。それまでは、動物学的な〝人〟に過ぎないのであって、万物の霊長たる〝人間〟ではないのです。

前項でも申しましたように、過保護はいけませんが、人間の子は親の保護が絶対に必要なのです。親の口から発せられる言葉を耳にし、それを真似ることによって言葉を覚え、人間の心を養い育てているのです。

昔は、赤ちゃんの周囲にはいつも人が大勢集まり、声をかけたものです。だから、皆、人間らしい人間になることが出来ました。ところが今は、核家族と呼ばれる小家族のため、赤ちゃんは人間の声を聞く機会が少なくなりました。

**親と子の楽しい思い出をつくろう**

それだけに、昔よりも一層親の責任が重くなったわけです。独りで遊んでいるから良い、と考えないで、出来る限り子供の相手になってやるべきです。親としてそれは何よりも大事な仕事であって、楽しい仕事のはずです。親子のこうした営みは、子供が成人しても心温まる思い出となり、親としても楽しい思い出となります。

また、こういう思い出を胸にもつ子供は、決して親に暴力を振うこともなく、非行に走るようなこともないと思います。

たとえ一時的にそういうことがあったとしても、楽しい親子の睦み合った記憶が子供をきっと立ち直

らせてくれると思います。

さて、三歳から四歳にかけての一年間を、学問的に〝言語の成熟期〟と呼び、この時期に最も目ざましい発達をしますので、親子の語らいばかりでなく、童話や物語りを読み聞かせる必要があります。〝猿蟹合戦〟や〝カチカチ山〟などの昔話は、意地悪をしてはいけないこと、親切や思いやりの大切なことを、知らず知らずのうちに子供の心にはぐくんでくれます。

とりわけ、母親の口から語られるこういう物語りは、テレビなどよりもずっと子供の心にしみとおり、子供もまたそれを大いに求めるものです。それは話の上手下手によりません。

また、子供は、気に入った話は何回でも聞きたがるものです。毎日、二回三回とくり返し聞いても決して飽きる様子がありません。親の方はくり返しが苦痛ですが、子供にはこのくり返しが必要なものですから、努力して子供の求めに応ずべきです。

そうしてやりますと、子供はすっかり物語りの全体を覚えてしまいますが、それでも親の口からそれを聞きたがって止みません。うっかりちょっとでも間違えますと、即座に「違う」と言ってその間違いを訂正します。

そこまでやることが大切なのです。そこまで行って完全に消化できたと言えるのであって、それが子供の能力を著しく育てるのです。と同時に、それが温かい親子関係を作り、それが親子を結びつける強い絆となるのです。

## 16　言わぬは言うにまさる

### ――黙って見守る愛のまなざし

中国の古典中の古典であり、かつわが国で最も尊重されている古典〝論語〟は、「学んで時にこれを習う。また悦ばしからずや」という孔子の言葉で始まっています。これが〝学習〟という言葉の語源です。

〝学ぶ〟とは、一般に、先生や書物から新しい知識を獲得することを言いますが、〝まなぶ〟であり、それは〝まね（真似）る〟の古語でもあります。つまり、〝まなぶ〟とは〝まねる〟ことであり、手本とする立派な人の言葉や行為を真似ることが〝学〟ということなのです。

幼児は、この〝真似〟をすることが大好きであり、また実に上手でもあります。だから、「幼児ほど〝学ぶ〟ことが好きで、かつ上手な者はない」と言うことが出来ると思います。そのお陰で、幼児は日に月に向上して行くことが出来るわけです。

さて〝習う〟ということは、〝慣れる〟の古語である〝慣る〟という言葉の変化（延音）したものですから、実は〝慣れる〟ということと同じことなのです。昔から「習うよりも慣れろ」という諺がよく使われていますが、ほんとは〝慣れる〟ことが〝習う〟ことなのです。

立派な人の言行を真似、その真似をくり返しくり返しやって、生まれつきそうであったと思われるような状態になるまで〝慣れる〟ことを〝習う〟というのです。

だから、昔の人はこのことを「習い性となる」と言ったものです。また、〝習〟と〝慣〟とをくっつけて〝習慣〟という言葉を作り、「習慣は第二の天性なり」とも言いました。

前項で述べましたように、幼児は〝くり返し〟が大好きで、大人だったらとても苦痛でたまらないような〝くり返し（練習）〟を、幼児は喜んで飽きずにやります。だから、〝学ぶ〟ことと同様、〝習う〟ことにおいても、「幼児ほど〝習う〟ことが好きな者はない」と言うことが出来ます。

## 幼児は生まれつきの学習好き

つまり、〝学習〟という言葉は幼児のために作られたようなもので、人間の一生のうちで、幼児期ほど、〝学習〟好きな時期はない、ということが出来ると思います。

このように、幼児はだれでも学習好きに生まれついているのですから、黙ってただ暖かい目で見守っていさえすれば、それだけでうまく行くはずなのに、わきから親が余計な口出しをして、子供のやる気をそいでいる、というのが遺憾ながら実情です。以前に取り上げたことがありますが、このことを〝助長〟と言って、親の最も陥り易い弱点です。〝助長〟は親の自己満足に過ぎず、事実は子供をそこねるだけの行為ですから、くれぐれも御注意が肝要です。「親の言う言葉で最も嫌な言葉は何か」を調査したことがありますが、その第一に、「勉強しようと思っている時に〝勉強しなさい〟と言われること」が挙げられています。正に「〝言わぬ〟は〝言う〟にまさる」です。

助長の害は〝ほったらかし〟よりも悪いものがありますが、ほったらかしは親の権利も責任も放棄するものであって、断じてあってはならない行為です。

助長には親の情が満ちていますから、子供をそこねる害はあるものの、子供は親の情にふれて人情を心に育くみます。ほったらかしには親の情が全くありませんから、子供を人情のない子供にする恐れがあります。

戦後、助長の害を説く余り、〝放任〟を良しとする風潮が生じ、そのため子供をほったらかしにする親が少なくありません。この頃、考えられないような非道な事件が新聞を賑わせていますが、その原因はここにあると私は思っています。

暖かい親心が子供の人情を育むのです。「目は口ほどに物を言い」の譬え通り、黙って見守る暖かいまなざしが、子供の心を明るくし安定させ、人間らしい心遣いを育てることを可能にするのです。

さて、子供は〝学習〟好きの上に、失敗しても挫けない強切な精神をもっていることを指摘したいと思います。歩き始めた赤ちゃんを見て下さい。いくら転んでも決して諦めずに立ち上がり、遂に必ず歩くことを可能にします。

親は子供のこの天性を信頼し、言わでもがなの言葉を慎しみ、助長せず、黙って暖かい目で見守っていればよいのです。子供は必ずだれでも、親を驚かすような能力を発揮させるものです。

その時は、すかさず感嘆の言葉を送ってやるのがよろしい。親の感嘆の言葉ほど子供の心を満足させ、さらに一層の向上心を湧き立たせるものはありません。それには常に見守っていることがどうしても必要です。

子供も時には自信を失う事があります。その時は、「きっとお前なら出来るよ」と確信をもって励ましてやることが必要です。親のその一言が子供を勇気づけて成功に導きます。

## 17 「隣りの子を見習え」はよそう

### ――本当にやる気をひき出すには

「言わぬは言うにまさる」ということで、雄弁の銀に対して「沈黙は金」の価値のあることを前項でお話しました。しかし、言葉は、適切に使われるならば、これほど価値の高いものはありません。

実は、言葉は偉大な力をもつものだからこそ、不用意に使うと害もまた甚だしいものがあるわけです。それで、不用意な言葉を戒めるために「言わぬは言うにまさる」という諺が出来たわけです。

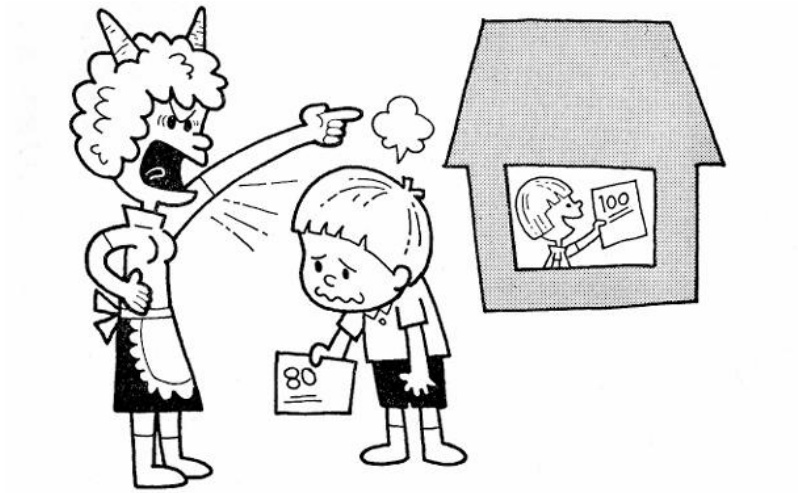
また、どんなに効く薬でも、常用していますとその効果が薄れるように、言葉も余り使いすぎますと、その効果が薄れます。だから「沈黙は金なり」という諺を作ってそれを戒めているわけです。

だから、ほんとは「言わぬは言うにまさる」であってはならないのです。沈黙が金であるならば、ダイヤモンドのような輝きをもった言葉の使い方をしたいものです。

例えば、子供が茶碗を運ぶ手伝いをしていて過って茶碗を落し、欠いたとしましょう。「まあ、お前っていつもそそっかしいからそういうことになるんです。もっと落着いて注意してやりなさい」と言って叱るタイプの母親があります。

こんな言い方をしてどんな効果を期待しているのでしょう。これこそ「言わぬ」方がずっとよろしい。でもこの掲合「沈黙は金なり」では決してありません。子供は茶碗を欠いたことで悪いことをしたと思い、困り切っているのです。「だれにだって失政することはあるものよ。心配しないでもいいの」とまず慰めてやるべきです。そう言って慰めてやらなければ、進んでお手伝いする気持がなくなるか、弱まるか、どちらかです。

「お母さんも子供の時、お手伝いをしていて茶碗を割ってしまったことがあるの。でも、どうして茶碗を落したのかな。茶碗の持ち方がいけなかったのかな。指の掛け方が足りなかったのかなって考えて、それでだんだん失政が少なくなり、上手にお手伝い出来るようになったのよ。失敗しても、その失敗を生かすことが肝腎なのね。」




「それから、欠けた茶碗を片づける時、欠け目が鋭いから指を切りやすいので、そっとつまむようにするのね」と言って教えてやることも必要です。こういう時こそ親の暖かい愛情で子供を包んでやることが必要なのです。

**試験の成績へ二つの対応が**

次に、子供が学校へ通うようになり、成績簿を家に持ち帰った時、それについて言う親の二通りの言い方を考えて

みましょう。例えば、評点が八十点だったと仮定します。

「八十点か。これ位の点で満足していてはだめよ。もっと順張って、今度は百点を取って来なさい」

「お母さんはね、よく百点を取ったものよ」というのがその一つです。

「まあ八十点。よくやったわね。えらいわね。でもお母さんはね、お前のことだからきっとこれ位はやる、と思っていたわよ」という言い方がその二です。どちらの言い方が子供にとってやる気を起こさせるでしょう。勿論後者です。前者の言い方をされたらやる気が起きるどころか、意気消沈です。

また、前者のような言い方をする母親は、百点を取って来たら満足するかと言いますと、決してそうではありません。「それでお隣りの○○ちゃんは何点だった?」とか、「百点取った子何人くらいいた?」とか言って尋ねます。我が子だけが百点だったということですと満足しますが、もしも「お隣りの○○ちゃんも百点だった」「百点を取った子が大勢いた」と聞きますと、途端に不満な顔になります。

もしも反対に、お隣りの○○ちゃんが百点て、わが子が八十点だったらどう言うでしょう。「お隣りの○○ちゃんはえらいわね。お前も○○ちゃんを見習って、同じように百点を取らないと恥ずかしいでしょ」と言います。

子供にとって確かにそれは恥かしいことです。それは母親に言われるまでもないことです。でもお隣りの○○ちゃんを見習えと言われても簡単に出来ることではありません。だから、よその子を引き合いにして見習えと言われるほどいやなことはない、とどの子も言います。

親は子供を奮起させようと思って言うのでしょうが、こういう言い方は奮起させるどころか、子供にやる気をなくさせるものです。それは子供の立場に立って考えたものではありません。子供に親の愛情を感じさせる言葉でなければ効き目はないのです。

「お隣りの○○ちゃんに見習え」と言う親に限って、子供が「お隣りの○○ちゃんが持っている玩具、僕にも買って」と言えば、「隣は隣、うちはうち、何でも人の真似をするもんじゃありません」と言います。

こんな理窟ばかり言っていますと、子供は「大人の言うことは勝手だ。人に見習えと言ったり、真似するなと言う」と考えて大人に不信の念を懐くようになります。こうなったらもうおしまいです。

# 18 親子で一緒に読むためのお話
## ――くり返しが何より大好き

〝親子で一緒に読むためのお話〟をしましょう。そこでまずその利用の仕方や注意を述べたいと思います。学習は、広く多くのお話を〝学ぶ〟ことよりも、たった一つのお話でもこれをくり返しくり返し〝習う〟ことの方が有効です。これっぽっちとばかにしないで大いに活用していただきたいと思います。幼児は、母親からお話を聞くこと、母親に物語りを読んでもらうことを、何よりも喜ぶものです。それは、そうすることによって子供が言葉を理解し、覚え、言葉を使うことが出来るようになるために必要なことだからです。

人間の心を〝精神〟と呼んでいますように、心の働きは神が人間に与えて下さったものの最も精妙なものですが、それは言葉の働きそのものにほかなりません。

バイブルに「初めに言葉ありき。言葉は神なりき」とありますが、人間の心が言葉の働きであるからには、人間の心を〝精神〟と名付けたこともさることながら、このバイブルの叙述くらい言葉の偉大さを表現した文章はないと思います。

この〝神〟である言葉により、子供の心は磨かれて〝精神〟にと高められていくのですから、言葉の教育ほど大切な教育はない、ということが出来ます。しかし、この〝言葉の教育〟は、言葉そのものを子供に教え込もうとしても、決してうまく行きません。

それよりも、毎日子供の喜ぶお話をくり返して聞かせることが、効果の高い〝言葉の教育〟法なのです。子供は、好きな話は何回聞いても決して飽きることがありません。子供のその要求に応えて何回でもくり返してお話をしてやることが大切です。

私も三十年前、毎日毎晩、子供にせがまれて話をしてやったものです。子供は決して新しい話をせがみません。毎日毎晩、同じ話を聞きたがるのです。それも一度や二度では満足しません。終わるや否や「もう一回して」と言うのです。

そのくらい子供は〝くり返し〟が好きです。だから、子供の好きなお話は、決って〝くり返し〟があります。桃太郎では、「桃太郎さん、桃太郎さん。お腰に着けたものは何ですか」に始まる問答は三回くり返されます。猿蟹合戦でも、蟹が水をやりながら「早く芽を出せ柿の種。出さぬと鋏でちょん切る

ぞ」というせりふをやはり三回くり返します。子供はこのくり返しが大好きで、その三回目に子供の喜びは最高潮に達します。

だから、この三回目のせりふは、特に力を込めて芝居気たっぷりに話してやらなければなりません。そうすれば、子供もそれに合せて得意気にせりふを語るでしょう。ところが、この三回目を省略してしまう親が多いのです。これでは楽しさは半減し、言葉の学習効果も半減してしまいます。

### 避けたい〝クライマックス〟の省略

半減は誇張ではありません。実際はむしろそれ以下なのです。なぜなら、学習効果は子供の興味関心に正比例するので、子供の期待を裏切る〝クライマックスの省略〟はとても〝半減〟どころでは済みません。大人は子供と正反対で、くり返しが苦痛です。だから、省略したい気持はよく解りますが、ここは子供のためを思って辛抱しなければなりません。

ここに幼児の姿、幼児の本性がよく表現されていると思います。幼児に一度や二度の刺戟ではまず何の効果もない、と言って決して言い過ぎではありません。三度めからが価値が出て、くり返すたびに効果が倍増するように思われます。

ところがたいていの親は、自分がくり返しを好まないのと、くり返しは現状維持で進歩ではない、と思っているむのですから、次から次と新しいお話をしてやり新しい刺戟を与えることに努力します。

しかし、そういう新しいお話は、一度や二度では受け入れることがむずかしく、受入れても消化がよく出来ませんので、子供の心を養うまでに至らず、いつともなく子供の頭から消え失せてしまいます。だから、新しい刺戟を次から次と子供に与えることは全く無益です。与えなかったと同じことです。

しかし、無益だけで済めばまだよろしい。もしもそのために、反復嫌いの子供になったら大変です。

くり返しは、一見無益な行為に見えますが、これほど大切なものはありません。回を重ねるごとに習熟し、身につき、能力が伸びるのです。くり返しはいくらくり返しても、多過ぎるということはないものです。

# 19 漢字は幼児期にこそ
## ――教えるより環境づくりを

言葉の能力が知能を決定することを実証したのはアメリカの人間工学研究所であり、それはすでに二十年も昔のことです。しかし、それにしてはその教育はまことに変りばえがありません。

また、言葉の教育は幼児期が最も重要で、その最も基本的な能力は生後の、五年間に作られてしまうことが、世界のいずれの文明国でも実験によって明らかにされていますのに、親に対するこの面の啓蒙がどこの国でも余り熱心でないのはどうしたことでしょう。

一九三〇年以来、アメリカでは多くの学者がチンパンジーに言葉を教える努力を払って来ましたが、チンパンジーはついに言葉を覚えることが出来ませんでした。チンパンジーは言葉が覚えられないので、何万年たっても少しも進歩がないのです。

言葉の習得こそ人類に許された切り札的な能力で、これを伸ばすことこそ何ごとにもまして重要な能力ですが、この能力も幼児期を外したら、どんなに教育しても出来ないことが、フランスの言語心理学者ポール・ショシャールの調査で明らかにされています。

フランスの黒人労働者の子供たちの知能指数が低く、フランスの文化的な生活に適応しにくいのは、幼児期を黒人社会で生活し、言語能力が育たなかったためであり、フランスで生まれフランスの社会で成長した黒人の子供は完全なフランス語を覚え、それを語る能力を身につける。そういう黒人の子供はほとんどフランスの子供と同じ高さの知能をもつことを、ショシャールは調査してこれを明らかにしたのです。

一九二〇年、インドで発見された狼少女カマラのことについては、シング牧師の手記やゲゼル博士の著書がこれを精しく報じております。その中で最も感動的なのは、カマラが言葉を覚えるまでは人間的感情が全くなかったのに、言葉を覚えるにつれて、喜びや悲しみの感情が芽ばえ、やがて恥じらいの感情さえもつようになった、ということです。

### 言葉は人間の心を育む

言葉は人間の心そのものです。言葉を知らなかったカマラは人間の心を持たなかったのです。だから、

妹のアマラが死んだ時、食事をするだけの元気を失ったのにもかかわらず、顔に悲しみの表情が全く見えず、涙一滴出さなかったのです。

それが言葉を覚え、使えるようになると、悲しい時には涙をポロポロとこぼすようになりました。正に言葉は人間の心を育て養うものです。

その言葉は、口を出た途端にこの世のものでなくなってしまいます。どんなに立派な言葉でも残すことが出来ません。人類はどんなにか「言葉を長く保存したい」と願ったことでしょう。そして終に文字を発明しました。文字は消えることのない〝目で見る言葉〟です。

この〝目で見る言葉〟のお蔭で、私たちは偉大な釈迦、キリスト、孔子の言葉を今聞くことが出来るようになりました。だから、人類は文字を発明してからの数千年間に、それ以前の百千倍もの長い期間にもなかった驚くほどの進歩が遂げられたのです。

文字のお蔭で、いつどんな時代の、どこの国のどんな人の言葉でも聞くことが出来るので、その貴重な体験を僅かな時間に自分に取り入れることが出来、自分を高めることが出来るようになりました。誠に有難いことです。

しかし、それも文字がよく読めての話で、文字が読めないことにはどんなに有難い本でも〝猫に小判〟です。わが国の文字は漢字です。だから、漢字力を養うことが何にもまして大切なのです。

その漢字力は、言葉と全く同じで、幼児期にこれを養い育てなかったら、あとでどんなに努力しても手遅れです。漢字力をつけるには別に難かしいことはありません。幼児が両親の会話を耳にしている間に、ひとりでに言葉を覚えるように、漢字も、これを特別教えてやるのだという意識をもつ必要は全くありません。幼児は漢字を知りたがっています。だから幼児の目の届く所に漢字が沢山あり、親がこれを声を出して読んでいれば、幼児はひとりでに漢字を覚えます。教えてやろうとすれば、かえって拒否し、覚えないものです。

〝学習〟と〝勉強〟の違いは、課せられた学習を〝勉強〟と言い、勉強では学習効果は上がりません。〝学習〟は自分から望んでするものであり、こうして身についたものが真の能力になるのです。

ところが、親の情は〝学習〟が待てないで、わが子に〝勉強〟させます。また〝助長〟します。親のその気持が強ければ強いほど、逆に効果が薄れ、その上悪い副産物がつきます。

幼児は本来好奇心が強く、何ごとによらず知りたがっているのですから、強制する必要は全くないの

です。好奇心をそそるような配慮が大切です。そういう配慮をせず、頭から教え込もうとする親は浅慮という他はありません。

## 20 好奇心は進歩の原動力

### ――重要な〝発見の喜び〟

世界的な数学者として著名な、文化勲章受賞者、故・岡潔先生は、〝発見の鋭い喜び〟という表現で、「発見することの喜び」をあらゆる喜びの中の最高のものだとおっしゃっています。

そして「ひと度この喜びを味わったなら、だれだってこの発見の喜びを求めて、研究に励まざるを得なくなるに違いない」とおっしゃって、この〝発見の喜び〟を幼い時期にたっぷりと味わわせることの重要さを指摘していらっしゃいます。

ところで、幼児期ほど好奇心が強く、絶えず好奇に満ちた目を輝かして新しい発見を求め回る、という時期は他にありません。そして「これは何だろう」「どんな働きをするものだろう」と常に疑問を懐き、その解明に努めます。

だから、幼児期に頭の働きが最も活発で大きく、だから知能が向上するのです。「これは何だろう」「どんな働きをするものだろう」と考えることが頭を働かせることであり、頭を働かせることが知能を向上させるものだからです。

ところが、子供たちが疑問を懐く前に、「これは○○というもので、○○するものよ」というように教えてしまう親が少なくありません。こういう育てられ方を受けた子供は、確かに知識は豊富になりますが、頭の働きは必ずしも良くなりません。それよりも何より問題なのは、このような育てられ方をしますと、意欲の強い子供になりにくいという欠点が生じやすいことです。

好奇心は強い意欲の表われであって、これが進歩向上の原動力であり、有難いことに、どの子にも立派に備わっているものです。この好奇心がある限り、子供はひとりでに頭を使って思考しますので、知能は自然と向上するわけです。

幼児期には、この「自分の頭を使って思考する」ことが最も大切で、知識を蓄えることなどどうでも良いことなのです。知識を広めるのはいつでも出来ることですが、知能を向上させることは幼児期にし

か出来ないことだからです。

「三つ子の魂百までも」という諺は、その意味でも正しい真理であることが、現代の最も新しい科学である大脳生理学によって、「人間の思考を司る大脳は、その大部分が幼児期に完成される」という事実により証明されました。

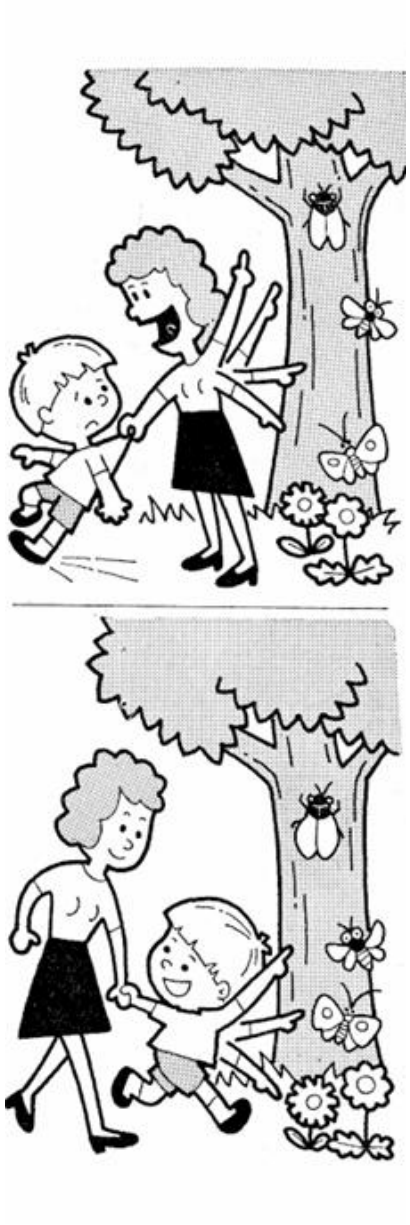
### 推理力、洞察力も自ずと発達

もちろん「知識を頭の中に蓄える」という記憶力も知能の一面ではありますが、それよりも「ある知識を基に推理する」という推理力や洞察力などの方がより重要な知能であり、このような能力は、知識の詰め込みに精力が費されているようだと、その発達が妨げられるのです。

だから、〝蟻・蜂・蟬〟……という漢字を、それらの事物の体験に応じて教えてやるのはよろしいですが、これらの字をよく見てごらん。同じ形をした所があるよ」と教えてやらない方がよいのです。まして「〝虫〟という所が同じでしょ。これは〝むし〟という字で……」などと教えてやってはいけません。

それは幼児から〝発見の鋭い喜び〟を奪うことになります。そのような知識は与えてやらなくても、幼児に必ず発見できることなのです。早いか遅いかの違いはあっても、必ず気が付くはずです。それまで待ってやることが大切なのです。

蟻と蜂に共通する〝虫〟の部分に気付いた子供は目を輝かして、そのことをお母さんに訴えるでしょう。その時「まあ偉いわねえ」と言ってほめてやり、その上で〝虫〟について教えてやれば、子供は耳を傾けてこれを聴き、その知識は生きた本物の知識になるでしょう。これに反して、親の方から一方的



に知識の詰め込みをしたらどうでしょう。いくら熱心に教えてやったところで、興味に乏しいので耳を傾けて聴くことが出来ません。従って、その知識は不消化で決して深いものになりません。

その上いけないことは、すでに述べましたように、詰め込み教育を続けていますと、そういう受け身の生活に慣れて、好奇心に目を輝かして意欲的に物を視ることが出来なくなります。そのことが最も恐しいことです。

「知識を与えてやる」ことが悪いのではありません。「求めていないのに与える」ことが悪いのです。この「求めていないのに与える」ことを〝詰め込み〟というのです。子供が知識を求めている時に「知識を与えない」ことは悪いことです。

ところが、詰め込みをする親に限って、子供が求める時に、「今忙しいのよ」と言って拒絶するものです。

## 21 質問こそ学問の要件

### ――子供の問いかけを尊重しよう

湯川秀樹先生は、〝旅路〟という本の中で幼年時代の思い出を、次のように語っていらっしゃいます。

「仕事をしている母に向って、私はよくいろいろな質問をした。すると母は、いつも仕事の手を休め、私の方に向き直り、私の目を優しく見つめながら答えてくれた」と。

人間は他の動物と異なり、大脳が全く未完成の状態で生まれるため何も出来ないのに、幼児は強い好奇心のあるお蔭で知識をどんどん吸収し、どんな動物よりも優れた能力を育てる事が出来るのだと思います。

だから、子供の質問に対しては、湯川先生のお母さんのように、どんなに重要な仕事をさしおいても答えてやることが、絶対に必要なことだと思います。湯川先生があのように偉大な学者になられたのも、このようなお母さんに育てられたからだと私は思いますが、いかがでしょうか。

望みもしないのに詰め込まれた知識は消化されにくいので、真の知識にはなりません。子供が「知り

たい」と願い、心からこれを求めた時に与えてやってこそ真の知識になるものです。

ところが、子供が求める時には答えてやらないで、子供が求めもしないのに知識を詰め込もうとするお母さんが少なくありません。列車や電車の中でよく見かけることですが、子供が熱心に問いかけているのに、うるさいとばかりにはねつけるもの、または下らぬ週刊誌に読みふけっている姿を見かけます。

車の中は騒音で会話には適しない所ですから、あえて「答えてやりなさい」とは申しませんが、子供の熱心な質問に対して少なくとも冷淡であってはならない、と私は思うのです。

〝学問〟という言葉が〝質問〟の〝問〟という漢字によって作られているように、質問は学問の重大な要件です。多くの物ごとに対して疑問を懐き、これを追究する気持が強いことにより深い学識を身につけることが出来るのだと思います。

「疑問を解決したい」という気持は、人間誰もが持っている本能的なものだと思います。だから、疑問が生ずると何とかこれを解決したいと熱望し、解決できない間は心が落着かないものです。

それだけに、自力でこれが解決できた時の喜びは、何ものにも代えられないものがあると思います。岡先生のおっしゃる「発見の鋭い喜び」も、その一つだと言えましょう。

## 常に疑問に答える姿勢を

しかしながら、まだ幼児には自力でこれを解決する力がありませんから、その疑問を母親が解いてやらなければなりません。母親にその疑問を解いてもらえれば、幼児は空腹時に御馳走をもらったように満足感が得られ、それが幼児の疑問を求める姿勢をさらに強めるのだと思います。

それに反して、子供の強い疑問に対して親がいつも冷淡でいますと、子供は「疑問を解決することの喜び――知ることの喜び」をいつも味わうことなく終りますから、自然と「疑問を持とうとしない子供」になっていきます。

昔から「問うは一時の恥、知らぬは一生の恥」と言われていて、質問することには恥ずかしさが伴うものとされています。事実、私たち大人は、疑問があって、それを知りたいと思いながら、恥ずかしさのためなかなか人に尋ねることをしません。だから、知らないままに一生を過ごすことになり、「一生の恥」をかき通す愚行を犯すわけです。

孔子は誰よりも祭祀について熟知していたのに、その執行に当たって一つ一つ係官に質問した、と論

語に述べられていますし、また孔文子という人は、自分のわからないことは相手が誰であろうと恥ずかしがらずに質問した、とあります。

してみると、どうも知識の豊かな人ほど恥ずかしがらずに質問するもののようです。これは、恥ずかしがらずに質問したから、知識の豊かな人になれた、というのがほんとかも知れません。それはともあれ、「知識の貧弱な人ほど質問しない」ことは明瞭な事実です。

ところが、幼児は、質問することを少しも恥ずかしいことと思っていません。だからこそ幼児は目を輝かして質問をするのです。それ故に、幼児の質問を大いに歓迎し、喜んで答えてやるならば、ただ知識が豊かになるだけでなく、いつまでも質問することを恥ずかしく思わない人間になれるのではないかと思います。

湯川先生ほど偉大な方でも、幼い時にお母さんに疑問を解いてもらった時の情景をいつまでもなつかしんでいらっしゃるのです。この事は、お母さんにとっても同じだろうと思われます。

このような幼児期の親子の語らいほど、いついつまでも、思い出して心温まるものはないでしょう。こういう思い出を胸にもつ親子は生涯きっと幸福だろうと思います。

（「母と子の新聞」連載〝教育講座〟昭和五十六年四月～五十八年三月）